

特集

オープンソースソフトウェアの現状

オープンソースソフトウェアの開発スタイルとその変遷

FreeBSDプロジェクトに見るオープンソース開発プロジェクトの実際

Apacheプロジェクトに見るオープンソース開発の実際

業務システムインテグレーションの事例

プロセス制御システムへのLinux 適用事例

我が国におけるオープンソースソフトウェアの利用状況

オープンソース・フリーソフトウェアの法的課題

オープンソース ソフトウェア

Open Source Software

特集：
オープンソース
ソフトウェア

編集にあたって： オープンソースソフトウェア への扉を開こう

青山幹雄

上野浩一郎

南山大学数理情報学部情報通信学科
mikio.aoyama@nifty.com

三菱電機（株）
ueno@isl.melco.co.jp

本特集は、ソフトウェアの開発と利用の現場で広がりつつある「オープンソースソフトウェア」を、開発と利用の両方の視点から、かつ、技術と法律の両面にわたって紹介する。

オープンソースソフトウェアは、「ソースコードが公開された」ソフトウェアである。近年、LinuxやApacheなど、オープンソースソフトウェアが実務でも広く利用されるようになってきている。

しかし、「オープンソースソフトウェア」、「フリーソフトウェア」など、類似の用語があって意味が混乱しており、よく分からないという疑問の声を聞く。また、「オープンソースソフトウェア」の開発実態がよく分からないので、業務に導入するには不安があるという実務家の声も少なくない。

そのため、オープンソースソフトウェアの実態をソフトウェア工学的見地から分析し、その意義を明らかにし、従来のソフトウェア開発へフィードバックしようとする研究が世界的に行われている。ソフトウェア工学国際会議ではオープンソースをテーマとするワークショップが開催されている。また、ソフトウェア工学研究会でも、ワークショップのテーマとしてオープンソースを取り上げて議論した。

このような研究の結果、オープンソースソフトウェアの技術要素やビジネスモデルが明らかになってきた。この中には、従来のソフトウェア開発技術やビジネス利用に新たな知見を加えるものもあり、その影響は少なくない。さらに、オープンソースソフトウェアがビジネスの中で地歩を確立しつつあることから、今後のソフトウェア開発とそのビジネスにおいて、オープンソースソフトウェアの意義を理解しておく必要が高まるといえる。

このような背景から、本特集では、従来、「オープンソースソフトウェア」という言葉で象徴的に語られてきたソフトウェア開発の実態やその技術的本質を明らかにするよう企画した。

本特集の構成を図-1に示す。

最初の「オープンソフトウェアの現状」では、オープンソースソフトウェアとは何かを示し、その技術的現状を概観する。

オープンソースソフトウェアの技術は、開発技術と利用技術に分けて紹介する。執筆者は、いずれも、オープ

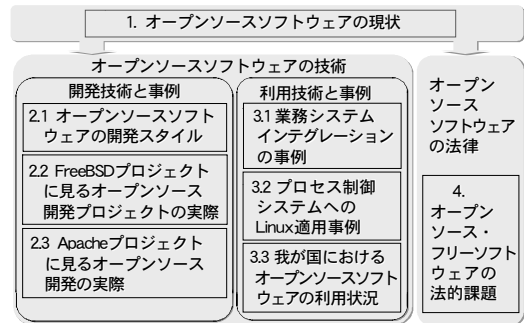


図-1 本特集の構成

ンソースソフトウェアの開発や利用に実際に従事している技術者、研究者である。

開発技術では、まず、「オープンソースソフトウェアの開発スタイルとその変遷」で、開発プロセスと開発環境を紹介する。次に、「FreeBSDプロジェクトに見るオープンソース開発プロジェクトの実際」は大学を中心とする開発事例を紹介する。一方、近年、新たなオープンソースソフトウェアの形態として台頭しつつある、企業が中心となった開発事例を紹介したのが、「Apacheプロジェクトに見るオープンソース開発の実際」である。

オープンソースソフトウェアの利用事例として「業務システムインテグレーションの事例」では、業務アプリケーションへの適用事例を紹介する。これに対し、「プロセス制御システムへのLinux適用事例」は、ミッションクリティカルなシステムへの適用事例の紹介である。あわせて、国内ユーザ企業におけるオープンソースの利用実態サーベイの要約を紹介する。

最後に、オープンソースソフトウェアの知的財産権やライセンスなどの法律面を「オープンソース・フリーソフトウェアの法的課題」で解説している。

本特集を契機として、読者が、オープンソースソフトウェアの理解を深め、その開発や適切な利用を推進されることを期待する。

なお、本特集は、2001年度に（社）情報サービス産業協会オープンソース調査委員会の報告書の一部を基に改訂したものである。本調査にご協力いただいた関係各位に感謝する。また、本特集の編集にあたって閲読にご協力をいただいた編集委員各位に感謝する。

(平成14年11月18日)